

平成24年度 学校自己評価表(最終評価)

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>「倉吉東高のかたち」の理想に沿った様々な教育活動を充実発展させるとともに、主体的な学習者・21世紀の日本を支え、世界をリードする高い志を持った人材の育成をめざす。</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>1 主体的学習者の育成 2 進路指導の充実 3 積極的な活動の創成 4 広報連携力の強化 5 専攻科教育の充実 6 定時制教育の充実</p>
---------------------------	--	----------------------	---

年度当初				評価結果			
評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	次年度へ向けての改善方策
1. 主体的学習者の育成	文武両道と規律ある生活による自立の促進	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校の中が品位ある言動に満ち、落ち着いた雰囲気を感じられる。</li> <li>生徒自身が環境整備や規律徹底に向けて主体的に行動している。</li> <li>全員が部活動に加入し、部活動が日々の学習の下支えとなるような主体的、積極的な活動となっている。</li> <li>教職員に「率先垂範」の意識が浸透し、協働性のある指導ができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>気持ちのよい挨拶ができるようになったが、計画性のない行動や服装違反が一部見られる。</li> <li>周りに気配りができず、環境整備や規律徹底に向けて協働性を発揮できない生徒がいる。</li> <li>部活動の加入率は高いが、高い目標を持ったけじめある練習や部室管理がうまくいっていない部がある。</li> <li>生徒に自ら範を示し、生徒の心に火をつけようと努力している職員がいる。</li> <li>具体的項目の実現に向けてアンテナを高めて分掌学年の仕事を進進しようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>気持ちのよい挨拶や服装を整えることなどがなぜ大切なのかを説明するとともに、指導7項目の遵守を徹底するよう、時期を逸せず全職員で指導する。</li> <li>生徒の主体的な活動を組織し、生徒会執行部や生活環境委員等を推進役とし、環境整備、規律徹底を推進する。</li> <li>部室管理や部活動時間の遵守を顧問と協力して推進し、部活動と学習の両立を図る。</li> <li>分掌、学年が協働性を発揮しながらそれぞれの任務を遂行することで、担任の生徒との面談時間を保障し、担任が生徒指導に全力で向かえるようにする。</li> <li>分掌再編の取り組みを定期的に検証し、課題を発見した場合は分掌、学年が柔軟に対応して速やかに適切な対応を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>校内でのあいさつはよいが、その態度が校内にとどまってしまっている状況が課題として残っている。尚、3年間皆勤の生徒が例年より多い36名となるなど、喜ばしい状況も生まれている。</li> <li>生活環境委員が中心となって、TEAS通信を発行するなど、生徒の活動が活発になった。</li> <li>部室点検などで、部室の使用状況はよくなってきたが、何件か部室の時間外使用によって指導を行った。また、放課後において部活動への切り換えにルーズな姿が見られる。</li> <li>担任の生徒との面談時間が確保できている。分掌と学年の協働性については、十分とは言えず、主任に仕事が集まっている。しかし、特に業務量の多い3年については、出願、面接など進路指導において学年部員(分掌部員)の協力が得られている。</li> <li>職員間で分掌再編の目的を確認しながら協働性を高めてきているものの、いまだ「率先垂範」という状況にはなっていない。</li> <li>学校評価アンケートによると学年が上がるにつれ生徒、保護者の学校満足度が高まり、肯定的な回答が90%をこえている。また、規律のある生活、生活指導、職員への信頼、生徒の人間の成長等の項目でも90%前後と肯定的な評価が非常に高かった。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>引き続き、全職員で呼びかけ指導をしていくとともに、良い点は積極的に顕彰していく。</li> <li>教員の人数で割ってある現在の掃除区域を見直し、生徒自身が責任をもって清掃にあたるような工夫をする。</li> <li>常任委員を中心に、部室使用のきまりを確認する。顧問と担任が連携してけじめのある行動がとれるようにする。</li> <li>分掌・学年の協働性が発揮できなかった仕事について年度末反省で洗い出し、次年度の具体的な改善策を示す。</li> <li>倉吉東高の職員文化として、協働性の発揮を定着させるために、丁寧に目標を共有するとともに、職員研修や情報発信等工夫する。</li> </ul>
	「協同的な学び」の研究推進	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業を通して、各教科の魅力や奥深さが生徒に伝わり、学習が内発的・主体的なものとなっている。</li> <li>テストや大学受験といった実利的目的を越えて、生徒の学びが真理探究といった高次なものとなっている。</li> <li>生徒の進路希望や発達段階に応じて、教員が集団として時宜にかなった教科指導を行っている。</li> <li>「協同的な学び」をはじめとした、指導力を高めるための教員研修が積極的に行われ、その成果が日々の学習指導に還元されている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒の学習が内発的・主体的なものへ高まっているとは言えない部分がある。</li> <li>生徒の学習が課題提出やテストなどに追われている傾向が依然としてある。</li> <li>生徒個々の進路志望や発達段階に応じたきめ細かい教科指導を教員集団全体として十分に行えているとは言えない部分がある。</li> <li>教員研修の成果が日々の学習指導に十分に還元されていない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>年度の初めに「協同的な学び」に係わる先進校教員を招聘し、教員を対象に理論と概要について研修の場を設け、理解と意識の向上を図る。</li> <li>重点教科を設け、先進校教員との示範授業・研究授業・授業研究会を通して指導力の向上を図る。(国・英・理・体)</li> <li>アドバイザーを委嘱し、中間評価・最終評価をはじめ年間を通して本校の取り組み全般の改良改善を図る。</li> <li>実態把握のできる分析・評価法を研究し実践する。</li> <li>「協同的な学び推進チーム」のミーティングを適宜行い、計画の進捗状況を確認するとともに、分析と評価を行い、課題の解決を図る。</li> <li>教科専門研修に積極的に参加し、その内容を教科内あるいは全職員で共有し日常の授業で活かす。</li> <li>「協同的な学び」通信を適宜発行したり、教務室に関連図書を常設するなどして啓発を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>5月2日に広島県立廿日市高校の才木校長先生を講師に、理論と概要についての研修を行い、協同的な学びへの導入をはかった。</li> <li>モデル教科の英語(目崎先生)、国語(香山先生)、理科(柴田先生)、体育(倉本先生)について研究授業、示範授業、授業研究会を計画通り実施し、各教科において考え方や手法について実践力を高めた。</li> <li>授業アンケートの項目に関して、アドバイザー(小谷先生)の意見を取り入れた。今後、振り返りにおいて各教科・実践者に対して助言をいただいた。</li> <li>実態把握のできる分析・評価方法の研究は十分ではなかった。</li> <li>年度当初「協同的な学び推進チーム」のミーティングを発足させるとともに、進捗状況や評価のまとめなど関連する事案は適宜教科学年主任会で検討し、各教科が課題を共有して取り組んだ。</li> <li>教科専門研修には、5教科で参加し研修している。理論研修にも参加しており、職員研修の場にて全職員に報告した。各研修の内容が伝達され、授業で盛んに実践されている教科もある。</li> <li>通信による啓発を月に1度行っている。関連図書を購入していただき、職員室に常設したが、盛んに購読されているとはいえない。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>年度当初に理論研修を計画し、事業の導入を図る。</li> <li>来年度のモデル教科と示範授業・研究授業の計画を立てる。</li> <li>アドバイザーとの連携を深め、今年度以上に取り組みに参画していただき事業の充実を図る。</li> <li>協同的な学びを取り入れた授業における評価方法を研究し、実践する必要がある。</li> <li>毎週行われる教科学年主任会で、進捗状況、評価の集約やその他重要案件について議論していく。</li> <li>先進校視察や1週間研修に教員を派遣し、授業改善によって生徒の意識や姿勢に変容がおこることを認識し実践力をつけ、事業を促進する。</li> <li>校内職員研修、通信や関連図書によって事業を啓発していく。</li> <li>生徒の主体性を育成するためさらに包括的な考え方であるアクティブラーニングの導入を検討する。</li> </ul>
2. 進路指導の充実	OJTの充実と進路指導力の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>進路指導に関する必要な情報を提供したり、研修の場を設定することにより、全職員が進路指導に関わろうという意識を持ち、適切な知識や技能を習得している。</li> <li>生徒が「学力＝生活力」であることを自覚し、その意義が「今・自分・依存」から「未来・社会・貢献」へと開かれるような、生き方指導を行っている。</li> <li>生徒の志望や適性を理解した上で、望ましい将来像を示しながら、3年間のどの段階においても適切な指導を行っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>知識や技能に個人差があり、進路指導が担任など特定の教員に偏る傾向がある。</li> <li>多くの生徒が適切な目標を立て、望ましい進路選択を行っているが、意識が「受験学力」を高めることのみにとどまってしまう傾向が一部の生徒に見られ、指導に改善の余地が残る。</li> <li>進路研修会等様々な場面を設定しているが、進路指導の知識や技能をうまく伝承しているとは言えない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>担任を中心に学年部が一体となって進路指導に当たる。</li> <li>学年を中心に家庭学習時間・模試結果・志望など生徒に関する情報を綿密に分析し、そのデータを学校全体で共有しながら、データ活用能力を高める。</li> <li>全職員が、全ての学校教育活動が「倉吉東高校のかたち」に基づいて行われていることを認識し、授業や進路指導など様々な場面で生徒・保護者へ本校教育理念を浸透させ、受験を通して自らを高め、社会に関わろうとする意識を高める努力をする。</li> <li>研修会などの特別の場面のみでなく日々の取り組みが自己を向上させるということを理解し、自主的に学ぶ姿勢を持ち、進んで進路指導力を高める努力をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学年内での連携が改善され、志望や教科ごとの進路指導が行われた。</li> <li>3年・専攻科は3回、1・2年は2回の進路判定会(検討会)を行った。また学習時間や模試結果はその都度資料作成や分析を行い、改善の材料とした。</li> <li>年間を通しての取組みの中で、大学入試の先にある社会や他者に目を向け、それらに貢献するために自己を高めようとする生徒が増えてきたように感じた。</li> <li>推薦・AO入試の指導やクラスの枠を超えた志望ごとの面接指導の中で、教員間で連携を取りながら、多くの教員が指導力を高めることができた。また12月進路判定会には47名(6月34名)の参加があった。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>今後も学年部員が授業以外で生徒に関わる機会を設け、担任と情報を共有していく取組みを継続する。</li> <li>資料作成を簡単に行えるシステムを検討し、その後の分析や指導をスムーズに行うことができるようにする。</li> <li>様々な教育活動の根底には常に「倉吉東高校のかたち」があることを生徒に認識させるとともに、HPなどを使って保護者や校外へも積極的に発信していく。</li> <li>全職員が学年や教科の枠を超えて、進路指導に携わる機会を増やすことで、その知識や技術を伝承しながら、3年間の進路指導の流れを共有していく。</li> </ul>
	中堅・難関大学合格者数の発展	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域を代表する進学校としてふさわしい実績を維持し、向上が期待できる。</li> <li>現役合格者数150名以上。</li> <li>中堅大学レベル以上合格者数70名以上。</li> <li>難関大学合格者現浪合計20名以上。</li> <li>東京大学5名。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>(現役合格)</li> <li>H23年度145名。H22年度157名。H21年度175名。(中堅大学レベル以上)</li> <li>H23年度66名。H22年度67名。H21年度83名。</li> <li>(難関大学)</li> <li>H23年度21名。H22年度16名。H21年度33名。</li> <li>(東京大学)</li> <li>H23年度3名。H22年度6名。H21年度4名。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>すべての生徒にCT(センターテスト)に対応できる学力をつける。</li> <li>1年次から継続して志望校指導、受験校指導を行う。</li> <li>2次試験に必要な力をつけるために、グレードに合わせた補習授業や課外の在り方を工夫する。</li> <li>卒業生や専攻科生に接したり、県内外での難関大合宿などに参加することで、目標に対するビジョンを明確なものにできるよう指導する。</li> <li>文理學術クラスを学年のリーダー的クラスに成長させるため、学力だけでなく人間力の面でも学校全体で一貫した指導を行う。</li> <li>東大志望者のチーム力を高めるとともに、東大の入試問題を研究し、前年度の結果をデータとして活用する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>各学年の丁寧な指導のお陰で、1・2年とも11月進研模試では7月回との比較において成績が上昇し、全国SS50以下の生徒も減少した。</li> <li>1・2年とも進路希望調査の上、志望校検討会や面談を行い、3年次での受験校志望に繋げている。</li> <li>センター試験後は2次課外を行い、グレード別の2次力の育成に努めるが、ほとんどの生徒がそれぞれの目標に合った講座を受講している。</li> <li>9月3年東大講座には11名(3専)、11月2年難関大合宿(岡山)には7名、12月1年東大難関大合宿(鳥取)には21名の生徒が参加し、他校の生徒や講師から様々な刺激を受けることができた。</li> <li>後期生徒会に2年4組から2名の副会長が立候補するなど、文理學術クラスの中に生徒会活動をリードしようとするムードが高まってきた。</li> <li>他校との合宿などを通して、1・2年生の中に東大を目指す生徒が増えてきた。また1年生は首都圏研修で東大を訪れ、その魅力を肌で感じる事ができた。</li> <li>各教科ごとに東大入試問題の研究を行ってはいるが、キャリア形成部としてそれを集約してはいない。</li> <li>東大合格2名(現1、浪1)、難関大合格21名(現9、浪12)、国公立大合格196名(現139、浪57)。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>1・2年次の国数英の基礎力を定着させるための指導を生徒の実態を正しく把握した上で、計画的に行う。</li> <li>1年次からの志望校指導は適切な進路指導において非常に有効であり、今後も継続していく。</li> <li>過去問を研究し、講座の内容の一層の充実を図る。</li> <li>校外の合宿等で受けた刺激をどう日頃の学習に生かすかが、今後の課題である。一過性の行事で終わらせないよう、他の生徒への還元や日々の授業との関連などの方策を検討する。</li> <li>今後も人間の成長の必要性を理解した上で、部活動・生徒会・学園祭・フォーラムなどに積極的に携わる生徒が増えるよう指導する。</li> <li>東大で学ぶことの意義を理解させ、東大を目指す生徒が増えるよう指導すると同時に、それに相応しい学力が育成できるよう教科・学年で一層の連携を図る。</li> </ul>

評価項目	具体的項目	目指す姿	現状	具体的方策	経過・達成状況	評価	次年度へ向けての改善方策
3. 積極的な活動の創成	活動創成と人間関係・社会的自己実現等、育成したい生徒像の具体化	<ul style="list-style-type: none"> <li>各学年にリーダーシップのとれる生徒が一定数おり、その生徒を他の生徒が積極的に支えようとしている。</li> <li>生徒自身が社会に関心を持ち、社会的課題に対して主体的にアプローチしている。</li> <li>各生徒が自己肯定感を持ち、他生徒に対して敬意を払いながら、協同してよりよい環境を作ろうとしている。</li> <li>自分や社会の将来について先見性を持ち、それに必要な力を自覚し、主体的にその力をつけようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>リーダーの資質を持っている生徒は少ないが、まだその資質を十分に発揮できていない面もある。</li> <li>自らを中心においた関心の同心円が、もっと広がっていき余地がある。</li> <li>自己の能力を少しでも伸ばしていこうとする生徒が多い中で、自らの持つ資質に自信が持てないまま、学校生活に消極的になっている生徒もいる。</li> <li>概ね計画性をもって自らを律しながら生活できているが、現在における自分の状況や感情にとらわれて、やるべきことの優先順位を見極められない場面も見られる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒会活動をより活性化させ、学園祭や国際高校生フォーラムなどの行事を通し、リーダーシップを発動できる場を数多く設定する。部活動においては適切な目標を立て、計画的で活発な活動ができるようにする。</li> <li>学園祭におけるプレゼンテーションコンテストの内容充実や、ボランティア活動の自主参加の拡大を図り、より広い社会へとつながっていくようにする。</li> <li>生徒会行事や部活動、クラスの係活動などを通し、自らの役割を果たす喜びを感じさせる。</li> <li>学園祭や国際高校生フォーラム等の学校行事を生徒自らの手で計画、準備、運営させて行くことにより、見通しや段取りを大切に育てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>行事を通して、生徒会執行部や実行委員がリーダーとなり全校生徒の積極的な活動を促し、学園祭・高校生国際フォーラムを成功に導いた。来年度の活動についても、後期生徒会執行部が中心となって計画立案を進めている。</li> <li>部活動においては、全国大会での活躍を含め、活発に行われているが、放課後の部活動への切り換えが鈍い実態も見られる。</li> <li>プレゼンテーションコンテストの研究支援会への教員の参加も多く、例年以上に充実した発表内容となった。国際高校生フォーラムでは発表者や実行委員以外の生徒の参加意識が低いと指摘もあり、次年度のテーマを討論するようなLHRや、新入生も含めてそのテーマに関した小論文を課すなどの計画を立てている。</li> <li>生徒会行事や部活動、クラスの係活動に積極的に取り組み達成感を得ている生徒も多いが、依然として消極的な生徒も見られる。</li> <li>行事をとおして、成功や失敗の中から多くのことを学び、成長していく姿が見られる。しかし、その学びが日常生活の向上につながっていない生徒も発見される。</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>より多くの生徒を巻き込んでいけるよう、声かけを行う。</li> <li>部活動の活動状況を正確に把握し、学年と部顧問が連携して活動できる環境を作る。また、授業から部活動への切り替えを素早くする。</li> <li>引き続き読書小論文活動やチューター制度なども連携させて、生徒の主体的姿勢を醸成する。</li> <li>日常的に取り組める委員会活動の内容を再検討し、多くの生徒が取り組めるようにする。</li> <li>自らが学んだこと、得た力を日常生活に生かせるよう感想文を書くなど言語化させる活動をする。また、過去にこだわることなく、創造的な姿勢で行事に取り組ませる。</li> </ul>
4. 広報連携力の強化	積極的な広報活動による地域や中学校からの共感の促進 育友会・同窓会との連携促進	<ul style="list-style-type: none"> <li>地域の方や各中学校に本校の教育方針や教育内容が十分理解され評価されている。</li> <li>本校が各中学校の実態を十分理解しており、生活指導・学習指導について、中学・高校の連続性がある。</li> <li>中学教育を支援するため、本校が持つ資源を積極的に提供している。</li> <li>本校の進路指導や大学の現状に対する保護者の理解が深い。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本校の教育方針・教育内容・生徒指導などについて、中学校教員や生徒、保護者の理解が不十分な点がある。</li> <li>管理職だけでなく、多くの教員が中学校訪問を行い、本校の教育について説明をしている。</li> <li>倉吉東中学校と「スクラム教育推進事業」を行い、英語・数学における連携を深めているが、全教科・領域の連携に至っておらず、中学校の状況が十分に理解できているとは言えない状況にある。</li> <li>中学生特別講座を実施し、中学レベルを超えた英語力の育成を支援している。</li> <li>「中部地区小中学校・高等学校連携推進事業」によって英語・音楽・体育の教員派遣を行っている。</li> <li>保護者に対しては、8月、2月の進路講演会の他、11月に大学見学会を実施して、情報提供を行っている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>本校のHPを通じて、教育活動の様子を適切に外部へ情報発信できるよう努める。</li> <li>中学生を対象とする高校説明会を充実させ、本校への進学意欲を高める。</li> <li>中学校主催の説明会や進路学習の機会を利用して、教員が積極的に中学校に出向き、本校の理解が深まるよう工夫する。</li> <li>本校へ学校訪問等に来られた外部の方への説明を、キャリア形成部や企画推進部以外の教員も行い、本校の取り組みを外部に発信する能力の向上に努める。</li> <li>倉吉東中学校との「スクラム教育推進事業」を充実させるとともに、中部地区全体の中高連携を促進する。</li> <li>公開授業等を積極的に利用して、中学校教育の状況把握に努める。</li> <li>部活動でも中学と合同練習を行うなど、可能な範囲で交流を行う。</li> <li>中学生英語特別講座への参加拡大を促進すると同時に、中学教員の参加(参観、ティームティーチングなど)を呼びかける。</li> <li>中学校出前授業に積極的に応じる。</li> <li>保護者対象の進路講演会や大学見学会への参加者を増やすとともに内容を充実させ、保護者の理解を深める。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>HPは適切に更新されており、学校の情報を外部に発信できている。</li> <li>体験入学では、高校生のチューターによる施設案内が好評であった。しかし参加者名簿がなかったため、運営面でやや支障をきたした。</li> <li>中学校主催の説明会は多くの教員が中学に出向き、説明した。</li> <li>学校訪問の対応については、管理職・企画推進・キャリア形成中心であったが、質問内容に応じて担当者が対応した。</li> <li>スクラム教育・中高連携は2年目となり内容も充実し、倉吉東中での数学講座・英語長文講座や授業相互参観などを実施した。</li> <li>エキスパート教員の公開授業等の情報が発信され、中学校に出向きやすい状況ができています。</li> <li>バスケット部、卓球部、サッカー部などで、合同練習等が実施されている。</li> <li>中学校英語特別講座は参加者88名で昨年より減少、9月22日から全5回で実施され、9割以上の参加者から「満足、やや満足」という回答を得た。</li> <li>出前授業には、今年度は小学校からの要請に応じて教員を派遣した。</li> <li>保護者対象の大学見学会は、11月14日(水)に実施。今年度は鳥取環境大学、鳥取大学を訪問し、施設見学や本校OBの学生との懇談を行った。参加者は23名と昨年より10名程度少なかったが、地元大学の様子を知ることができ有意義であったとの感想が多く聞かれた。特に大学生との昼食会の満足度が高かった。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>保護者のアクセスは多いが、中学生のアクセスが少ないようなので、高校説明会等を通じてPRしてゆく。</li> <li>来年度は申し込み段階から中学生の氏名も把握し、スムーズな運営を目指す。またグループ討議も行う。</li> <li>効果的な説明ができるよう、適切な資料の準備と教員に対する説明会を実施する。</li> <li>事前に受けた質問内容に応じ、多くの分掌の教員も積極的に関わっていく。</li> <li>成果の検証や、連携カリキュラムの確立を進めるとともに、中学校との連携を密にし、今後も継続していく。</li> <li>中学校での授業参観を積極的に呼び掛けている。</li> <li>中学校との合同練習等を、部顧問に呼びかける。</li> <li>中学生や中学校教員及び保護者に英語特別講座の意義を広報しつつ、今後も継続していく。</li> <li>今後も要請に対しては積極的に応じていく。</li> <li>大学見学会では来年度以降も大学生との昼食会を継続実施していきたい。</li> <li>行事の際には、市役所の記者クラブに事前に取材依頼を行い、一般紙を通じて東高の取り組みをPRしていく。</li> </ul>
5. 専攻科教育の充実	予備校との差異化と適正な進学実績の維持 閉科後の備え	<ul style="list-style-type: none"> <li>昭和36年に専攻科が設置された意義を理解し、感謝の気持ちを持つとともに、学問に対して誠実に主体的に取り組むことによる、公共の利益に資する精神を涵養している。</li> <li>受験勉強を超えた学びの本質に触れ続けることにより、個人的自己実現から社会的自己実現の学習へと深化している。</li> <li>専攻科生が「主体的な学習者」としての姿を見せることにより、現役生をリードしている。</li> <li>専攻科全体でのセンター点の伸び平均が100点を超え、難関大合格10名、国公立合格50名となっている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒は感謝と公共の精神の大切さについて理解しており、校内では挨拶や清掃活動、現役生への進路チュータリングなどの活動に積極的に参加している。しかし、地域社会で評価されるまでには至っていない。</li> <li>受験学力をつけるだけでよいと考える生徒はおらず、社会的自己実現を志向する意義を理解しているが、社会経験に乏しく、本当の力がついているとは言えない。</li> <li>現役生への「進路チュータリング」や「学び祭り」のプレゼンなどで専攻科生の取り組みを伝えているが、十分とは言えない。</li> <li>例年より幅広い学力層の生徒への指導が必要である。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>専攻科で学ぶ意義について折に触れて説明し、専攻科が単に大学合格だけを指すところではなく人間力を高める場であることを理解させる。</li> <li>自主的なボランティア活動への参加を促すとともに、地域との交流など校外行事を計画し、地域社会と直に接することにより「役立ち感」を体験させるなど社会貢献を志向する態度と肯定的自己概念を育成する。</li> <li>従来から実施している「学び祭り」を充実・発展させ、発表テーマの設定・研究及びプレゼンテーションの内容を深化させる。(INPUT学習からOUTPUT学習への転換)</li> <li>県立図書館・学校図書館との連携を図り、あらゆるジャンルの書籍の読書をすすめていく。</li> <li>3年生との合同課外を実施し、互いに刺激を受けながら学び合うようにする。(専攻科2、3年生6の計8クラスの受験生の集団化)</li> <li>現役生への進路チューターや出前授業を行い、自身の取り組みを振り返るとともに「学ぶ者」としての範を示す。</li> <li>早朝学習と休日の校舎開放を行い基本的学習習慣を確立するとともに、面談を充実し適切な目標設定のもとに着実に学習に取り組めるようにする。</li> <li>専攻科OB・OGを招き講演会を開くなど、生徒の意欲を喚起する工夫をする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分が必要な情報をつかむために、勝手に来て、勝手に帰るということではなく、朝毎日早く来ることを徹底させ、ほとんどの生徒が7時台(数名は6時台)に来て、1限に向かって自習した。従って遅刻はない。また、登校時・下校時だけでなく、何回すれ違っても、そのたびに挨拶の励行を促し、人間関係を円滑にした。</li> <li>「学び祭り」は、予選では66テーマ、本選では3日間にわけ、20テーマについてプレゼン・質疑応答した。大学でも必要なプレゼン力・論文作成力を先取りした形であるが、2次の小論や総合問題を解く下地づくりでもある。本を楽しく読む習慣もつき、「学び」によって、個人的自己実現から、社会的自己実現に転化する意味がわかったようであった。</li> <li>受験生の先輩学年として、3年生をリードすべく、夏補習・秋の放課後補習・冬補習・センター後の2次課外をすべて、3・専合同で行い、進路意識の高揚・学力向上の相乗効果に努めた。</li> <li>英数の授業で、スクラム教育と称し、専攻科生が2年生全クラスに学びチューターとして出向いた。また、「学び祭り」の内容を低学年用にアレンジし、1年生全クラスに本選出場者10名が、プレゼンに出向いた。読書の大切さが伝わったようである。</li> <li>夏・冬と帰省するたびに、専攻科OB・OGが後輩に励ましの話しをしてくれたり、メッセージを書いてくれ、かなり勇気もらったようである。</li> </ul>	A	<ul style="list-style-type: none"> <li>まず、NPO倉吉鴨水館の立ち上げを賛美したい。そして、その精神が維持・継承できるようにソフト面・ハード面ともに支援する。</li> </ul>
6. 定時制教育の充実	積極的な生徒指導 進路保障と学力の向上	<ul style="list-style-type: none"> <li>自己の進路目標を決め、その実現のために積極的に学習や行事等に取り組んでいる。</li> <li>課題に真面目に取り組む、提出物の期限が守られている。</li> <li>わかりやすい授業と個々の実態に応じたきめ細かい指導がなされている。</li> <li>生徒が心身ともに健康で、規律とけじめのある基本的な生活習慣を確立している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>3年生19名のうち進学希望が8名、就職希望が11名であるが、まだ、自己の将来像を描いたり、進路を決めることが難しい生徒が多い。</li> <li>中学校で不登校経験を持つ生徒や、進路変更で転編入した生徒が多く、まず登校しレポートを提出することの指導が必要な生徒が多い。</li> <li>基礎的な学力が不足しているために、理解するのに時間がかかる。</li> <li>生活環境面などで問題を抱え、積極的に学習に取り組めない生徒が少なくない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ハローワークやキャリアアドバイザーとの連携を密にし、正規採用を増やす。</li> <li>卒業生等との座談会や進路講演会を効果的に取り入れ、進路意識の向上を図る。</li> <li>特別支援の必要な生徒の個別指導や、進路に対応した課外・添削指導を工夫する。</li> <li>夏季休業中に登校日を設定し、長期休業中の生徒理解・指導に生かす。</li> <li>積極的に面接や家庭訪問を実施して生徒一人ひとりのおかれている生活状況等を把握し、保護者と連携して進路実現に向けたきめ細かい指導を行う。</li> <li>定期的な情報交換会を持ち、生徒個々の状況を職員間で共有して連携した指導を行う。</li> <li>授業公開・授業研究への参加者を増やしたり、他校視察をして授業改善に生かす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>進学は短大2名、専門学校1名、進学予定2名。就職は正規採用2名、現在の仕事の継続7名、就職予定4名。まだ就職先が未定の生徒がいるが、キャリアアドバイザーや進路担当者による志望理由書の指導や面接練習を繰り返し実施することによって自信をもって受験しようという生徒も増えた。</li> <li>卒業生との座談会で直接卒業生の声を聞いたり、大学の進路担当者の講演会を開催したことは進路意識の向上に有意義であった。</li> <li>特別支援会議を開催して専門家の意見も聞きながら個別の支援計画を立てたり、課外等に取り組んだ。</li> <li>今年度新たに夏季休業中に登校日や課外を実施した。長期休業後も平日課外に取り組む生徒も出てきた。</li> <li>面接機会を増やすとともに家庭訪問や電話連絡を継続し、保護者と連携しながら個別指導を継続したが、長期欠席者や休学者が増えた。後半はhyper-QUの結果を活用した面談や、専門家との個別面談を増やした。</li> <li>毎週の情報交換会に加えて状況に応じた情報交換を実施して共通理解を深めたので、状況把握や生徒指導等に直ぐに対応できた。</li> <li>後期の授業公開は参観回数が増えた。授業の工夫の1つとして「褒める</li> </ul>	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>1年次からのキャリアアドバイザーや進路担当者との面談、2年次のハローワークにおける適性検査・職業診断等の取組を実施するとともに、3年次生徒には年度当初から計画的に正規採用に向けた職場訪問や書類作成・面接指導を行う。</li> <li>卒業生との座談会の人選や会場の配置を工夫したり、定時制で先進的な取組をされている方の講演会を実施して、進路意識の向上に努める。</li> <li>特別支援の必要な生徒にあわせた具体的な支援計画を作成して、職員が共通理解して指導を行う。</li> <li>自分の進路を考えた課外参加者がまだ少ないので、課外を計画的に実施し、進学・就職それぞれの生徒に対応した指導を行う。</li> <li>退学者・休学者を減らすために、さらに職員間で連絡を密にし、保護者と連携した粘り強い指導を行う。</li> <li>授業参観の視点を工夫したり、他校視察をして授業改善に生かす。</li> </ul>

○ 評価基準

- A 本校の現状を大幅に改善し、目指す姿にほぼ到達した。課題は少なく、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、最低でも80%以上になっている。
- B 課題はあるが、改善に向けた取り組みが効果を上げつつある。現状に満足する状態ではないが、一定の成果があり、今後改善していく見込みがある。数値的目標を掲げた項目では、60%～80%の範囲内になっている。
- C 課題を解決するにはまだ多くのステップがある。一定の成果はあがっているが、さらなる努力が必要である。数値的目標を掲げた項目では、40%～60%の範囲内になっている。
- D 改善に向けた具体方策の効果が上がらず、本校の現状が改善されていない。依然として課題が多く、今後の改善があまり見込めない。方策の全面的な見直しが必要である。数値的目標を掲げた項目では、最高でも40%未満である。